

ある住職の壮大な実験

●放送ジャーナリスト ばばこういち

—

一つの寺の住職が、宗派を超えた仏教の人材育成のために外国派遣の奨学制度を行っているという話を小耳にはさんだのは、五月の初めのことだった。

そんな奇特な坊さんがほんとうにいるのかというのが、この話を聞いた時の率直な感想だった。

今の日本のお寺や坊さんへの私のイメージは

極めて悪い。お経をあげ、戒名をつけてもらうという日本古来の習慣もおいそれと頼めない。莫大ばくだいなお金を取られるという危惧きぐんが強いからだ。しかも宗教法人の優遇税制を利用して金儲かねもちけに励んでいるという印象も少くない。昨年、私の父が亡くなったときも坊さんに来てもらわず、戒名もつけず私たち近親者だけで葬ったのも、お金をかけたくないというだけでなく、こうしたお寺や坊さんの生臭い金儲けの論理に自分の父親の死を委ねたくないと考えたからにはかな

らない。

この坊さんの話を聞いたのは、ちょうどオウム真理教の事件がテレビで連日洪水のように報じられていた時期であった。

オウムの是非は別として、若い人々がなぜオウムに次々と入信していくのか、そこに現代社会の、現代宗教の病理があるように思えてならない。

日本の仏教はおよそ一四〇〇年前、インド、中国、朝鮮を経由して伝えられた。天台宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、臨済宗、日蓮宗、日蓮正宗など様々な宗派に分かれ、およそ七万五〇〇〇の寺院、約一〇万人の僧侶、約数千万人の仏教信者がいるといわれている。

しかし、そのほとんどは葬式や法事がその活動の多くの部分を占めていて、本来仏教が果たすべき世直しの役割を實踐しているとは到底思われない。

それどころか、この社会の体制におもねり、その庇護ひごの中でぬくぬく現世の利益を貪むさぼっているというのが、その実態のように感じられる。それをまた日本人の大部分も是としてきたことから、日本の仏教の保守化と墮落だらくが経常化してしまってきたのだろう。

だが、この寺の坊さんは、仏教は葬式や法事という人間の死のみにかかわる形骸化けいがいしたものであってはならない、と考えて活動している珍しい存在なのだと知人は言った。

ほんとうにそうなのか。そんな革新的な坊さんがこの国に存在するのか……。

私は興味を持った。そこで直接電話をして取材を申し入れることにしたのである。

二

「私オウムは認めません。しかし、オウムが出現したということは、現代仏教の在り方が厳し



く問われているという証だと感じています」

黒田武志さんは開口一番こう言った。

横浜善光寺は、横浜市港南区の日野にある。

黒田さんは、この横浜善光寺の住職である。

横浜善光寺といっても長野にある善光寺とは

関係はない。

一九三八年（昭和一三年）一月生まれという

から、本年とって五七歳である。

「お寺は、人間の死にかかわる場所だけにしておいては、本来の役割を果たしたことにはならないとずっと考えてきました。生きている人間の喜怒哀楽のすべての心と、その折々にかかわることのできる開かれた場所だという認識が必要だと思うのです」

黒田さんは、自分の寺を地域社会のコミュニティの場所として位置づけ、布教の場、檀信徒の研修センターとして、それまで縁のなかつた若い人々にお寺に対する認識を改めさせたいと考え、実践してきたという。

ボーイスカウトや会社、団体、大学生などへの働きかけを行い、キリスト教顔負けの活動を展開して、十数年間に二六〇〇世帯の檀家を作りあげた。

「学ぶのも檀家なら、指導するのもまた檀家なのです。檀家には大勢の専門家や知識人がいます。こうした場があればすぐれた才能同士が出

会うこともできます。人は一人で生きていくのではなく、仏と有縁無縁の多くの人たちによって生かされているのです。

ですから、お寺はこうした人々を結びつける積極的な存在として、社会のお役に立っていくべきではないかと私は考えました」

黒田さんは、人との出会いを大切にするとして寺を考え、その中から人づくりこそ寺づくりなのだという哲学を生みだした。

こうした経過の中で黒田さんが海外に留学僧の派遣を始めたのが、一九八四年（昭和五九年）のことであった。

三

黒田武志さんは、栃木県の大田原市という、当時としては小さな寺の六男として生まれました。男ばかりの八人兄弟だった。

黒田さんの母親が嫁いで来た時の寺は、火災

があつた後で一六畳の本堂と八畳の板の間があるだけだったというから、相当な貧乏寺だったのでろう。

長男は早く病没したが、それでも男の子七人を育てる両親の苦労は容易なことではなかったに違いない。

「学校だけは出してやるが、後は自分の力で生きていけ」と父親は言った。

黒田さんは、駒沢大学を卒業し、大学院を終了した後、兄の勧めで曹洞宗大本山総持寺と永平寺で修行することになる。

「夜明け前からの掃除、一八時間に及ぶ坐禅、食事の作法から大小便の仕方まで事細かな規律……。流れの早い人生の中で、アルバイトでも結構稼げる時代でしたから、いったい自分は何でこんなバカなことをやっているんだろうと、悶々と日々を過ごしていました。その内身体を壊して寝込むようになり、こんなところで寝て

いるくらいなら、東京に帰ろうと考え、半年で永平寺を出ることにしたんです。ところが、福井の駅で東京とは反対の汽車に乗り間違え、富山に運ばれてしまいました」

これがきっかけになって、黒田さんの托鉢行脚が始まる。

「それは、それは想像以上にきびしいものでした。あるときは自分と同じくらいの若いお嬢さんから、へお通り〜と冷ややかに言われまして。へお通り〜というのは、邪魔だから他所へ行けということなんですが、初めの内はひどく腹が立ちました。

何カ月も経ち、お金もなく、冷たくされ、野宿を繰り返し、雨が降り、雪が降り、惨めで辛い毎日が続いた後、いつか私は京都に来ていました。食べ物を買うお金もないほど無一文でした。私はある女子校の前を『般若心経』を唱えながら歩いていました。

ふと気がつくと、一人の女学生がそばに来て一〇円のご喜捨を下さいました。すると次々たくさんの女学生たちがご喜捨をしてくれて、あつと言う間に応量器が一杯になったのです。

これでご飯が食べられる。お風呂にも入れる……。感謝で胸が一杯になった時、いつの間にか雨が上がり、雲の間から太陽の光がサーッと差し込んできたのでした」

黒田さんは、このとき一つの悟りを開いたというのである。人々がお互いに理解し、心底から助け合うことができたらどんなに幸せな世の中になるだろう、それをつくっていくことこそが仏教徒の生き方ではないのか……。と。

後年、留学僧育英会の構想が生まれるのも、この時の女子学生たちからの力尽きる寸前に助けられた経験が原点になっているという。

苦しい修行に耐える力と助け合う心。これが世界共通の人間の在り方になったときに、人間



ばばこういち氏に説明をする黒田方丈

はほんとうの幸せがつかめるのではないか、と黒田さんは考えた。

それからの黒田さんは、インドとタイで一年有半の修行をした後、釈尊の本源というべき宗派を超えた仏教に徹し、生きている人々の教化救済に努めることを決意する。

その後渡米した黒田さんは、ロサンゼルスの禅センターで二年間開教師として過ごし、人類の福祉の向上と世界の恒久的な平和実現のために自らを捧げようと、新寺を建立するため帰国する。

この黒田さんの情熱に賛同した多くの人々の支援を受けて、横浜市営墓地の門前に横浜善光寺が誕生するのである。

「私は、そこで葬儀や法事だけでなく、若い人々が、お寺に対する認識を改めてもらう第一歩として、子供たちを対象にした日曜学校から始めたのです」

この黒田さんの宗教人としての新しい実践活動は、たちまち多くの共感者を生み出し、十数年の間に、二六〇〇という強力な檀家をつくり上げることに成功した。

そんな宗教活動の中でも黒田さんは、宗派を超えた人材育成の夢を忘れなかった。

そしてついに、一九八四年一月一五日、善光寺開創一五周年を記念して開設したのが、海外留学僧育英会であった。

募集の範囲は宗派を問わないだけでなく、場合によっては僧籍がなくともよい。学業操行共に優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るぎなく、仏法のため、人のためなら自分の命も惜しまないという人材を選んで留学させ、そのための旅費、生活費のすべてを負担しようという制度である。

「各国に派遣された留学僧たちは、それぞれ立場で物を見、考え、修行という形に集約さ

せて帰ってきます。自ら国を選ぶのですから、当然その国で学ばなければならないという目的と意図があります。

彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのかそれはまったく未知数ですが、必ずや宗派を超えた本来の仏教徒になってくれるだろうと信じています。死者の供養だけを生業なりわいとするような安易な生活者になるのではなく、釈尊の教えを情熱を持って布教する宗教人になってくれるはずだと確信しています」と、黒田さんは自信を持って語るのだ。

四

私が、このシリーズ「高齢化社会」に黒田さんを取り上げたいと思った理由は、日本人の大多数が一番かわりのある仏教の戦後の在り方が世直しの主体足り得ていない、宗教者たちの現状へのアンチテーゼからである。

高度経済成長の論理の中で、日本における仏教人たちは調和のとれた社会づくりのためにどれだけ力を注いだのかと思う。

日本経済は確かに繁栄をもたらした。

だが、働いて得た富の配分は適正だったのか、経済の成長がもたらした環境破壊にどれだけ保険投資が行われたのか、都市化の中で、人々の心は蝕^{むし}まれていきはしなかったのか、老後の不安は解消できているのか……。

こうした様々の問題に戦後の宗教人たちはまともに取り組み、闘ってきたとは私には到底思えない。

そんな問題意識すらあつたのかも疑わしい。

お寺を立派にし、檀家を増やし、税制上の有利性に乗っかって事業拡大に努めてきた姿だけが浮き彫りにされて、宗教人に対する期待は一般市民の側にほとんどないのが実情だろう。

そんな中で、黒田さんは宗教の根源的な在り

方から見詰め直そうとした。

宗教人は生きている人々のために何ができるのかを自らに問うことから、黒田さんの行動は始まった。

黒田さんは、お寺を地域社会のコミュニケーションの場にしようとした。人々が集まり、語り合い、矛盾した社会の問題をどうしたら解決できるかの知恵を出し合う場にしようとした。

黒田さんの説教の場であるに止まらず檀家同士が互いに学び合う場にしようとした。

そんなコミュニティーの場で黒田さんは、一食に一口のご飯を節約して善光寺に寄せてほしい、それで育英会を運営したいと呼びかけたのである。

やがて黒田さんの夢は、檀家の人々の夢となつて育英会が実現した。

すでに六〇人以上の留学僧たちが派遣され、多くのことを学んで帰ってきた。

五

今、日本の高齢者たちは、前号で触れた通り決して幸せな環境にはない。

そのために、戦後の多くの宗教人たちは本来の役割を果たして来たとはいえないだろう。

不幸な晩年を送って亡くなっていく人々をただ供養しただけで、その魂は平安に帰ることができないというのだろうか。

生きている間に、彼らに生きがいを感じさせ、自らの存在理由を自己確認させ、天寿を全うする時、欣然と死に向かうことができるようになることこそ、宗教者たちの最も重要な役割ではなかったのか。

オウム事件が一段落した後でさえ、宗教人たちからこの事件を通しての自らの総括が聞こえてこない現実には、私は今の日本の宗教界の衰微ぶりを感ぜずにはいられない。

そもそも仏教精神とは、和合の原理に始まったはずである。相手を倒したり、相手と対立したりするのではなく、相手を認め、相手を容認し、相手と仲良くすること。闘争するのではなく、互いに相手を理解し、協力することではなかったかと思う。

仏教の基本原理は「共生」であろう。仏教徒たちは、「共生」のためにこの国の戦後、何をしたのだろうか。

この国で、経済優先の価値観が怒濤のような力で強者、弱者をつくり上げてしまった現実には、仏教徒たちが立ち向かおうとしたことがあったのか。国内だけの問題ではない。国外においても日本経済は強大な力で開発途上国の市場を占有し、経済支配を強めてきたのである。それが反日感情を生み、経済摩擦をつくり出してきた。こうした弱肉強食の現実には仏教本来の和合の精神はどう発揮されたのか。

政治や経済の矛盾を精神の面から正面切つて問題提起したり、解決しようとするエネルギーが戦後の仏教界に存在していたとは思えない。

黒田さんの生き方は、この国の宗教人の生き方に一石を投ずるものだと思う。

六

話の後、黒田さんが寺を案内してくれた。本堂はきらびやかな装飾の少ない簡素な広場だ。

日本のお寺の本堂はどれもこれも重々しくきらびやかな装飾で一杯である。それがまた信者にありがたさや畏敬の念を起こさせる要素なのだろうが、横浜善光寺の場合は、檀家の人々が集い、語り合う広場になっている。

こんなところにも黒田任職の宗教家としての強い意志が貫かれているように見えた。

二一世紀は心の世紀だという。文明の進歩と人間の精神の「共生」こそが、新しい世紀に希

望をもたらずキーである。黒田さんの壮大な実験に注目したい。

——注 月刊「黙」（1995・8）より転載しました。

ばば・こういち 放送ジャーナリスト。本名・馬場康一。一九三三年大阪生まれ。山形育ち。東北大学経済学部卒業。大和証券事業法人部、文化放送アナウンス部、フジテレビ編成部を経て、東京12チャンネル（現テレビ東京）編成課長。その後フリーの放送ジャーナリストとしてテレビ、ラジオに出演。司会者、インタビュアー、レポーターなどレギュラー出演を中心に番組の企画、構成、プロデュースなどにも数多く参加。放送批評懇談会理事。